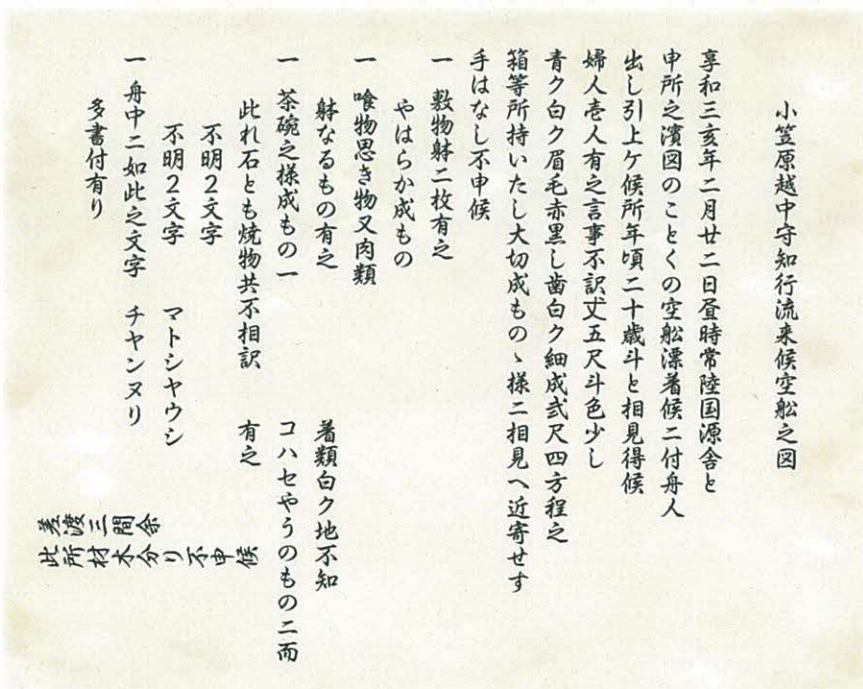




岡田家文書 No.1415「小笠原越中守知行流来候空船之図」写真



《現代語訳》

小笠原越中守知行所に流れてきた空船の図

1803年(旧暦)2月22日の昼頃、現在の茨城県あたりの源舎という場所の浜辺に、図のような空船が漂着したので、地元の船人たちが出て引き揚げたところ、年齢20歳程に見える女性が1人いた。日本語が通じず、身長は150cm程で、顔色は青白く、眉毛は赤黒い。歯は白く細い。60cm四方程の箱などを所持し、大切なもののように見え、他人を近寄らせず、箱から手を離さない。

- 1 数物のようなものが2枚ある。柔らかいものである。
 - 1 食べ物と思われるものと、肉類のようなものがある。
 - 1 茶碗のようなものが1つある。これは石とも焼物とも分らない。(不明4文字)
 - 1 船の内部に、この文字がたくさん書かれている。
- 着ているものは白く、生地は分らない。コハゼのようなものがある。
窓障子 松脂塗 (※ チャンとは、正確には松脂と乾性油を混ぜた瀝青のことで、防水に使用するもの)
長さ約5.5mあまり
(船の下) この部分は、木材が分らない。



特別章「空船」原本初公開

享和三年の「うつろ舟」事件とは？

江戸時代後期の享和3年(1803年)旧暦2月22日、現在の茨城県神栖市の浜辺の沖に舟のようなものが漂っていたので漁師達が浜辺に引き上げたところ、丸い舟には松脂が塗り込められたガラス窓があり、下部は鉄板が張られていたと記録されています。

また、船内には外国のものと思われる文字が多数書かれており、言葉が通じない見慣れない格好の外国人と思われる若い女性に乗っていたとも記録されています。小さな箱を所持しており、その箱には人を近寄せなかったそうです。漁師達は古老と相談し、海に還したとも伝わっています。



★うつろ舟 模型 当館蔵 令和8年(2026年)

本市の「岡田家文書」に描かれた、マフィン型の「空船」を元に、愛知県西尾市岩瀬文庫の『漂流記集』に描かれた「うつろ舟」のカラーリングで再現しました。紫や赤、灰色や黒で塗られています。

「うつろ舟」の漂着地はどこか？

「うつろ舟」研究の第一人者である、岐阜大学の田中嘉津夫名誉教授によれば、平成26年(2014年)に発見された『伴家文書』に「常陸原舎り濱」と書かれており、伊能忠敬(1745年～1818年)が享和元年(1801年)に測量した地図には「常陸原」と共に「松下河内守知行所東下村舎利」とあることから、実際の地名であることが確認されています。この「舎り濱」とは、現在の茨城県神栖市(旧波崎町)にある「舎利浜」と考えられます。なお、「舎利浜」は、旗本の松下河内守保綱が知行していました。松下家は、武蔵国多摩郡和泉村も知行していたことから、『梅の塵』では漂着地を知行していた旗本の名前を小笠原和泉公と誤って書いてしまったのかも知れません。また、松下保綱は、河内守に叙任されていたことから、新利根川沿いにあった常陸国河内郡手栗村等を知行所としていた小笠原越中守と、利根川で情報が伝播する中で混同してしまった可能性もあります。

★舎利浜の写真

令和8年(2026年)4月11日撮影

「舎利浜」は海流が複雑なため危険なことから、砂浜から海へ近づくことはできません。この写真は、安全な場所から撮影したものです。近隣の波崎シーサイドパークから見える浜辺には、沢山の漂着物がありました。



(翻字)
常陸國舎利濱江
二月廿二日着致候船中に
武捨歳斗之美女一人
羅砂之着物ニテ喰物
澤山ニ貯有之勢の
高さ日本と替りなく
五尺斗ニ相見得候
船の深サ式間半程
横三間程南蠻鉄
二而格たる蓋武枝
有之外者唐木二而
作たるもの二而何木
と云處をしれす
言舌チンフンカンニテ
一切不相分徳(得)之
右之趣御訴ニ相成
候処近々紅毛通
辞御催促有之
様段々相知可申候
享和三年
亥二月着船
慶應三年
卯まで六十七年也
小笠原為治
書之

★『聞書覚及俳諧』の新聞記事(著作権の関係から展示のみとなります) 当館蔵 令和8年(2026年)

秋田県立図書館が所蔵する、麻生村肝煎の小笠原家と同族である種村(秋田県能代市二ツ井町種)の小笠原為治が慶応3年(1867年)に写した『聞書覚及俳諧』には、漂着地を「舎利浜」と明確に記述しており、慶応年間の秋田に漂着事件が伝わっていることが分かります。また、「うつろ舟」や「小笠原越中守」の記載が無く、身長が日本人と同じことや2枚の蓋、訴えや通辞といった記述もあることから、元の文書は初期資料(オリジン文書)に近い可能性があります。また、秋田にあった久保田藩を治めていた佐竹氏の旧領が常陸国であることから、何らかの関係があるのかも知れません。



なぜ「舍利浜」に漂着したのか？

「舍利浜」の先の海は鹿島灘です。鹿島灘は、北からの親潮(千島海流)と南からの黒潮(日本海流)がぶつかる海流の複雑な場所です。

19世紀初頭、欧米では産業革命が始まっていたとはいえ、まだ外洋船は帆船全盛期の時代で、台風等により海が荒れると、難破してしまう船もあったそうです。

そのような中、太平洋には北からはロシア船が通商を目的に、東と南からはアメリカやイギリスの船が、やはり通商や捕鯨等を目的に進出していった時代でした。もし、難破すれば、欧米やロシアの破船の残骸等が、「舍利浜」に漂着すること考えられます。



★『大日本国細図 常陸国 常州(地図)』
個人蔵 元治2年(1865年)

利根川河口に「常陸原」とありますが、伊能図では海岸部にあります。「東下(村)」に「舍利浜」がありました。「矢田部(村)」は東下村の北、「砂山」は更に北の若松地区です。東下村は波崎町になった後、矢田部村と若松村の一部を編入します。そして波崎町も合併により、現在は神栖市になりました。



★鹿島灘の怒涛 絵葉書
個人蔵 昭和戦前期

鹿島灘は、北からの親潮と南からの黒潮がぶつかる複雑な海流の場所です。打ち寄せる波が荒い場所もあり、鹿島灘の怒涛は絵葉書として販売されるほどでした。カメラが一般的ではなかった時代、絵葉書は観光土産として最適でした。

「うつろ舟」に書かれていた謎の文字は何なのか？

「うつろ舟」には、謎の文字が書かれていたとされており、様々議論されています。

まず、神代文字説です。平田篤胤(1776年～1843年)が著した『神字日文伝』には、疑いのある文字も含めて様々紹介されています。それらの文字の一種という説があります。

次にアルファベットのモノグラム説です。オランダ東インド会社のモノグラムは「VOC」を合わせたもので、そのモノグラムと謎の文字が近似しているとの説があります。

なお、「舍利浜」に欧米やロシアの難破船の残骸が漂着したと仮定した場合、積み荷の木箱に焼き印等でアルファベットや、船内に散らばったロシア貨幣のキリル文字等を見たとしたら、当時の漁師達にとっては、謎の文字に見えたのかも知れません。



★『神字日文伝 疑字篇』 平田篤胤著
個人蔵 文政2年(1819年)

江戸後期の国学者である平田篤胤が著した『神字日文伝』の内、疑義のある文字を紹介したものです。当書の中には、「うつろ舟」の文字に似ているものも存在します。



★オランダ東インド会社の貨幣
個人蔵 1790年

オランダ東インド会社の頭文字であるVOCが刻印された、現在のインドネシア等で主に使われていた貨幣です。VOCが「うつろ舟」の文字に似ています。



★パーヴェル1世時代のロシア貨幣
個人蔵 1798年

ロシア帝国の少額貨幣である1デンガです。デンガ(ДЕНГА)は元々は銀貨でしたが幣制改革により銅貨となり、1838年まで発行されました。



「うつろ舟」に乗っていた女性是谁なのか？

「うつろ舟」には、二十歳ほどの女性が乗っていたとされていますが、この女性は何者なのでしょう。一説には、金色姫と呼ばれる養蚕の神をイメージしたものではないかと言われています。金色姫は、元々は天竺の王女で、王族内の争いに巻き込まれたことから、王が「宇津魚舟」に乗せ、海に流したとされています。その舟が、常陸国の浜辺に漂着し、漁師に助けられるも衰弱し亡くなったとされています。そして金色姫の棺の中から、たくさんの蚕が現れ、これを育てることにより日本の養蚕が始まったとされています。

天竺から漂着したとされる金色姫は、常陸国三蚕神社と呼ばれる、蚕影神社(茨城県つくば市)、蚕養神社(茨城県日立市)、蚕霊神社(茨城県神栖市)で祀られています。この金色姫は、「宇津魚舟」が漂着したとされる神栖市の星福寺にも、蚕霊尊という蚕の神として祀られています。



★衣襲明神 掛軸 個人蔵 明治期以降

茨城県神栖市の星福寺には、金色姫と同一とされる蚕霊尊が祀られています。文政10年(1827年)には曲亭馬琴が衣襲明神という名前を新たに付け、賛文も書いています。この賛文を元にした様々なバリエーションも確認されています。



★蚕影山大神 掛軸 個人蔵 明治期以降

茨城県つくば市にある蚕影神社の総本社のもので、掛軸に描かれているのは蚕影山大神で、金色姫と同一視されていました。桑の木をくり抜いた「丸木舟」に乗って漂着の様子と、姫を助けた漁師夫婦が描かれています。

「うつろ舟」に乗っていた女性が持つ箱は何なのか？

『兎園小説』では、女性が慈しんだ男性の首が入った箱ではないかと書いていますが、これは漂着記録に後付けで物語化したものだと考えられます。江戸時代の実際の首桶と比較すると、2尺(60cm)四方の箱に首を入れるのは、かなり大き過ぎるとの指摘もあります。

女性の絵が衣襲明神をモデルにしていた場合、手に持っているのは蚕種紙というもので、蚕の卵を貼り付けた紙です。



★『首桶(未使用品) 個人蔵 江戸後期

女性は首の入った箱を持っていたのではないかとされることが、比較・検証用に実物を展示するものです。箱は60センチ四方(絵によっては直方体)とあるので、実際の首桶よりも大きくなることから、首の箱という主張は難しいと考えられます。



★蚕種紙 個人蔵 明治40年(1907年)

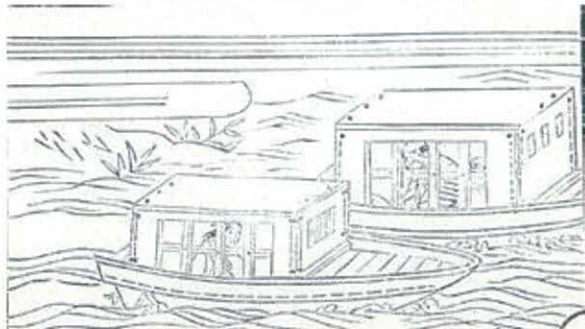
蚕の卵が貼り付けられた紙で、この卵を孵化させます。室温では約2週間で孵化しました。幕末から明治初期、フランスやイタリアへ蚕種紙が大量に輸出されました。日本の近代化を支える外貨獲得の重要な商品でもありました。



「うつろ舟」の形状の特徴は？

享和3年(1803年)の「うつろ舟」漂着事件よりも前に描かれた「うつろ舟」の絵画は、多くありませんが、正徳6年(1716年)の浮世草子である『今源氏空船』には、和舟に小屋を乗せた屋形船のような形状の舟として描かれており、当時の人々は「うつろ舟」の形状をこのようなものとして認識していたようです。

しかし、享和3年(1803年)の「うつろ舟」の形状は、それまでのものとは全く異なります。ガラス窓は松脂による防水加工、舟の下部が西洋の鉄材で補強されていることから、外洋船の特徴を持っています。ただし、丸い形状では外洋では回転してしまい、正常に航行することは不可能です。何らかの残骸が離散集合したり、転覆により丸い船底が海面に浮かんだりといった形で、結果として丸い形状に見えたということも考えられます。



★『今源氏空船』 西澤一風著
個人蔵 大正6年(1917年)

正徳4年(1714年)の江島生島事件(大奥の女性と歌舞伎役者との交際)を元に書かれた物語です。この中に、「空船」の絵が描かれています。船には箱があり、人が閉じ込められていますが、享和3年(1803年)のものとは全く違います。

中里村の古文書に書かれた「うつろ舟」の情報は、どこから来たのか？

中里村の名主は、近傍の栗橋宿で情報を得て文書に記録したと考えられます。栗橋宿の情報源は、日光道中を通じて江戸から届くものと、利根川舟運を通じて届くものと大きく2つありました。江戸からの場合、漂着事件の翌年に書かれたとされる瓦版等が元になる可能性もありますが、瓦版の文言や「うつろ舟」の描き方は、中里村の古文書とは似ていません。

もし、現在の神栖市で実際に何らかの漂着事件があったと仮定して、現在の神栖市から江戸、そして江戸から栗橋宿に情報が届いたとする場合、当時の物流の大動脈である利根川舟運を一切経ない情報伝播ルートがあったとするのは不自然です。現在の神栖市から伝言ゲームみたいな形で、利根川舟運により栗橋宿に「うつろ舟」の情報が伝わり、それが江戸に入ったとも考えられます。

★『大日本国々名高大川角力』 個人蔵 江戸後期

江戸時代後期に流行した、様々な番付表の中には、日本の川を比較したものもあります。東の大関は「利根川」、西の大関は「大井川」が選ばれています。日本には様々な川がありますが、当時から最重要の川であると認識されていました。



栗橋宿と常陸国の海岸とは、直接の関係があるのか？

栗橋は干鰯や魚粕といった肥料を扱う店が多くありました。利根川を通じて現在の神栖市や千葉県銚子市等から栗橋等へ運ばれ、栗橋等から馬背での運搬となりました。

★『東講商人鑑(パネル)』

国立国会図書館デジタルコレクションから

武州葛飾郡栗橋駅にあった店が紹介されています。魚粕や干鰯といった肥料が扱われており、農業が盛んな武蔵国で高い需要がありました。これらは、海のある銚子や常陸原から利根川を通じて栗橋宿に届いたと考えられます。



今後の展望は？

本市の「うつろ舟」の古文書は、シティセールスや商工観光の観点からも大いに活用可能なものです。世界中のUAP(未確認異常現象)研究家が興味を持つ可能性もあります。

なお、アメリカ合衆国では、軍関係者によるUAPの目撃情報もあることから、アメリカ連邦議会においてUAPに関する公聴会が開かれています。

日本においても国会の超党派で「安全保障から考える未確認異常現象解明議員連盟」が設立され議論されています。令和8年(2026年)5月28日には、同議連が官房長官に対しUAPへの対応体制構築に関する提言をしています。これは、アメリカ合衆国政府が非人間的知性体(NHI)の可能性を含むUAPの機密解除に舵を切った現状等に鑑みたものです。近い将来、UAPに関する新知見が生まれているかも知れません。その時のためにも、本市の「うつろ舟」に関する古文書を調査してまいります。

★阿古耶堂の铸件 個人蔵 昭和40年代半ば

介良事件(高知県でUFOを捕獲したとされる事件)のUFOに酷似した铸件の灰皿が確認されており、現在も未確認異常現象(UAP)の例として検証が続けられています。この铸件は山形県の最上鉄器で、阿古耶堂後藤铸造所が昭和40年代半ばに製作したものです。



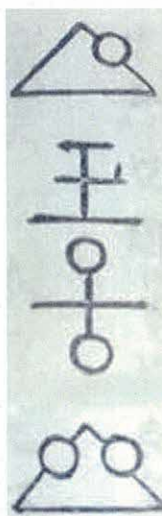
今回の調査の中で「うつろ舟」に書かれていたとされる文字について、とても興味深いことが分かってきました。下の写真は、「うつろ舟」漂着事件があったとされる享和3年(1803年)から少し前の18世紀末に発行された、ロシア皇帝パーヴェル1世の1デンガ銅貨です。

同じ文字が舟内に多く書いてあったという記録から、常陸国の漁師が最も多く目にする可能性のある文字は、大量に残された同一刻印となる少額貨幣の文字であったかも知れません。

貨幣の文字を見て、それを書き写すのではなく記憶を頼りに復元するとした場合、最初と最後の文字は記憶に残りやすいものの、真ん中の文字は曖昧になる可能性もあります。

特に「9」や「8」といった、「○」が含まれている文字は、江戸時代の人々にとっては馴染みがなく、強く印象に残ったことでしょう。江戸時代の大半の人々が、オランダの文字ですら見たことがない以上、キリル文字やアラビア数字は、不思議な文字に映ったのではないのでしょうか。

現代の日本人であっても、例えばタイ語やアラビア語の文字を一目見て、それを記憶で書く場合、同じ現象が起こると同様なことがあったのかも知れません。「うつろ舟」の中に多くあったとされる謎の文字と、貨幣単位の「ДЕНЬГА」、額面や年号の「1」や「8」、貨幣内に刻まれた横棒「—」といった文字・数字・模様が、並びも含めて酷似していると思われますが、今後の研究が待たれます。



※鎖国下において、江戸の文人達が、ロシア帝国の少額貨幣を目にするのは難しかったこと、地元の人しか知らない「舍利浜」という地名が記録されていること、現在の神栖市と栗橋地区は干鰯の流通路である利根川と一本でつながっており、その栗橋地区で記録が書かれたこと、秋田で初期文書の写本が発見されたことなどから、「うつろ舟」の漂着事件は、駄法螺ではなく実体があるのかも知れません。